

お 名 前	性 別	終戦時の年齢	終戦当時の住所
江島 誠一	男 性	3 1 歳	広島市己斐町

この記録は、中宇利の大岩節子さんから紹介いただきました。爆心から3kmの所にみえた故江島誠一さんが体験された原爆投下直後の広島市の凄惨な記録です。ご子息の昇一さんの了解を得て、掲載させていただきます。なお、昇一さんは現在、神奈川県相模原市でお好み焼き店を開いてみえますが、戦争の悲惨さや平和の尊さを後世に伝えるために、お好み焼きが焼きあがる間にお客様に折鶴を折っていただき、毎年8月6日の原爆の日に合わせて、広島に届ける活動を続けてみえます。

「原爆体験記 ～ 広島は青く燃えていた。」

草津町別宅を空けた私たちは、西大橋ふもとの一棟のアパートに引っ越した。3軒続きのどれに入居してもよいということで、最初は一番東寄りに家財を移した。大八車で往復したので、ラストは午後10時頃になったが、妻の美代子は急に何か落ち着かないとの理由で、西の端の家をしたいと言う。再度転宅となり、荷物を運び込んだのは午前1時頃になったが、今度は水の出が悪いから中の家に移ると言い出した。

私は、8月6日は午前8時に、相生橋西詰の事務所で呉の被爆工場視察のため、集合が約束してあったので、荷物の移動は仕事が終わってからにしてもらいたいと言ったが、それなら美代子が一人ですると言い出した。やむなく灯火管制下で、3度目の転宅という異常事態を経験することとなった。完了したのが午前3時を過ぎていた。目覚まし時計もどこへ押し込んでしまったのか分からなくなり、「7時半に起こしてくれ。」と言って、寝込んでしまった。私は便意で目が覚めた。腕時計は8時13分であった。

「おい、8時過ぎておるぞ！」怒鳴りながら小用を足していた。窓から眺めた8月6日の空は、真っ青でキラキラした朝を感じた。

「今日の朝日は、えらく大きいなー、それに昇りたての太陽のように紅いなー。」と思った。同時だった！マグネシウムを焚いたようなフラッシュを見た。フラッシュの玉は転がるように、左右に光の玉となって走っていった……。

「アッ！」私は顔が「アツイ！」と感じた。

「オイ、伏せろ！」大声で美代子に声をかけて、部屋に身を投げた。バリッという音と同時に、裏壁は窓ガラスの建具と共に玄関を突き抜けた。

「ドシッ！」そして、家の中は真っ暗になった。タンスが頭のわきに落ちてきた。天井が崩れ、瓦がバラバラ落ちてきた。

「どうしたのーッ」

台所あたりで美代子の声がした。彼女は私の大声で土間に伏せたとさう。

「アッ、昇一がいた！」私たちは初めて昇一に気づいた。1歳の昇一は、クチャクチャに垂れ下がった大きなカヤの中で泣いていた。カヤには無数のガラス破片が突き刺さっていた。私が右足に軽い傷をただけで、美代子にも昇一にも異常がなかった。まわりを片づけているうちに、大粒の黒い雨がポトポトと、バラバラと降ってきた。美代子は防空ずきんを、私はヘルメットをかぶった。天井が抜けたのだから、家の中は黒い雨で濡れていった。

市内中心部あたりから黒煙が広がっていき、やがて柱のように天にのびていった。時間の感覚も全くななくなっていた。畑の芋の茎が燃えている。温室も火を出した。私は大手町9丁目の家族のことが心配で西大橋を渡ったが、家が倒れて道路は大きな薪の山の峰つづき、火勢にはばまれて、前にも後ろにも動けなくなった。と、その時、三島淳三氏に会った。額から血の流れている青い顔は、恐怖の相そのものであった。私は尋ねた。

「大手町の方面は、どうですか」

「どうもこうもないよ。全滅よ。」と、人のことは分かるもんかと独り言のような返事が、薪の山を越えていった。

私は自宅へと引き返したが、その頃には国道2号線の宮島への方面は、土手といわず街道といわず畑といわず、道々には負傷者でお祭りの人出のようになっていた。あえぎながら、行列の中から次々と倒れていくと、それっきり動かなくなった。頭に木が刺さって角のようになり、手を引かれて歩く人……。リヤカーに乗せられた中年の男性は、割腹したような傷口から流れ出る自分の臓物を拾って押し込みながら、運ばれていった。髪の毛を逆立てて両手を下げて歩く人々は、顔の判別もできない。

私は再び体験する戦争の惨禍に絶望の悲しみを味わった。人類とは何者なのだろうと思った。何のために生まれてきたのかと思った。そして、このような悪質な私が、何故、約束の時間に寝すぎたために助かったのか、運命の不思議を感じた。

正午ごろだったか、韓国人の赤松氏（三菱下請け工場主）が、前身血まみれガラスで針ネズミのようになってやって来た。

「お宅もダメですなー、私が田舎に用意した家があるから、一緒に行きましょう」ということで、全壊した1日だけの借家を離れて観音村へと出発した。途中、藤岡さんの別邸で弟妹二人と合流した。大手町9丁目へは、火勢が衰えてから入ることにした。

井口救護所で、赤松氏は全身のガラスを、私は足のガラス傷を治療した。ガラ

スを抜いて赤チンを塗るだけで、痛み止めの薬品などはなくなっていた。井口に
あった借家主宅に立ち寄ったが、子ども一人であった。まもなく家の主人が全身
火ぶくれになって帰ってきた。美代子も私たちも、その方の看病と、また苦痛と疲
れで動けなくなった。美代子は、恐ろしいくらいに変貌している患者をよく看病
した。そのものすごい形相は、男性の私も、その方の子供も、恐れて気味悪くて
近寄らなかった。美代子は、その方を背負って便所に連れて行ったりした。医者
も呼んだが手の施しようがなく、赤チンを塗って包帯をするだけであった。その
夜、井口の家主の窓から見る広島之夜は真っ赤であった。赤松氏は言った。

「藤岡さん、これは原子爆弾ですよ。われわれ韓国人には、その情報は入ってい
たんですよ。」

「これで、日本も終わりですね。」私は戦局について、ある予感を彼と話し合った
ことがあるので、彼も素直に意見を述べ、美代子もそれなりに理解していた。

3日目に家主の奥さんが田舎から帰ってきたので病人を引き継ぎして、赤松氏
の用意した観音村に移ったが、そこでまた大変な事態になってしまった。

その前に、中心部の様子を記す。

8月7日朝、私は井口を出発して西大橋を渡り、市の中心部へ入っていった。
ノーパンクタイヤを装備した自転車に乗って、乗ったり降りたりして、己斐から
比治山まで一直線だ。あたりの風景が非常に近く感じられた。自転車を降りると、
土が熱かった。まだいたるところに焼け残った死体が散らばっていた。明治橋に
さしかかると、橋の上は黒く焦げた死体が重なり合っていた。50人ぐらいであ
ろうか………、その中に息をしている婦人が黒焦げになった赤ちゃんを腕にして
転がっていた。ジグザグに歩いていた私に声をかけた。

「お兄さん、お水を飲ませてよ。」

水を飲むと死ぬと言われているから、もうちょっと我慢していなさい。今、兵隊
さんが助けてくれるからね。」

「あんたは薄情な人ね。」と恨めしそうに私を見上げたが、私は父母兄弟のことを
気にして先を急いだ。こんな姿で家族に会うのなら、もう会いたくない、どうか
死んでいておくれ、とも思っ泣けてきた。途中、知人であったので声をかけた
が、放心したような状態で全然反応を示さなかった。私は、彼は気がふれたのか
なと思った。それが放射能の影響で、やがて自分自身が体験する羽目になろうと
は、予想もできないでいた。

9丁目の家は完全に焼けていた。4日前に疎開の荷造りをしたトラック2台分
の、父のコレクションである美術品や私たちの調度品も焼失してしまった。家族
は山中女学校の校庭に転がっていたが、一同無事であった。弟妹二人を預かって
いると聞いて、両親は喜んだ。利夫（次男）は、近所の人々を助けたという話を

聞いた。平木さん一家だと思う。

父はサバサバしたと、私に話した。ちょうどその時、近所の人「^や「^{あと}焼^け跡^に立^って^いる^死体^は、^お宅^の叔^母さん^では^ない^か。」と^知ら^せて^きた。私^は末^一叔^父さん^と一^っ緒^に見^に行^った。末^一氏^宅の^焼け^跡に、^と溶^けた^らう^人形^のよ^うな、^黒く^焼けて^ビフ^テキ^のよ^うに^なった^遺体^を見^た。両^足は、^炊事^場の^レン^ガに^押さ^えつ^けられて^いた。両^手は^水道^のコ^{ック}を^握っ^てい^たよ^うで^あった。指^先は^骨だ^けに^なって^いた。顔^の輪^郭は、^その^面影^を残^して^いた。

「^熱か^った^だら^うな、^苦し^かっ^ただ^らう^な……」末^一叔^父さん^は、^死体^を抱^いて^泣い^た。私^も一^っ緒^に泣^いた。トラック^が来^て、^人夫^風な^人が^手鍵^で引^っか^けて、^ポン^とトラック^に放^り上^げて^運ん^でい^った。ど^こで^火葬^された^のか、^我々^は知^らない。指^の骨^を持^った^まま、^叔父^{さん}と^私は^精い^っぱ^い涙^を流^した。

私^は帰^路に^つい^た。お^びた^だしい^死体^が、^川に^浮い^て沈^んで^流れ^てい^た。橋^げた^に引^っか^かっ^てい^たの^は、^若い^女性^であ^った。頑^丈な^体を^した^男性^もい^た。さ^っき、^私に^水を^飲ま^せて^くれ^と言^った^女性^は、^もう^息を^して^いて^いな^かっ^た。黒^焦げ^の赤^ちゃ^んを^抱い^て、^黒焦^げの^母親^は昇^天し^てい^た。

8月6日、夜^の食^事は、^救助^隊の^人々^が作^って^くれ^たに^ぎり^めし²個^を食^べた。^美代^子が^いつ^も列^に並^んで^人数^分を^確保^した^が、[「]下^さい、^下さ^いと^叫ん^で手^を出^すの^は、^あさ^まし^くて^辛い。[」]と^言っ^た。当^時の^大衆^は、^行政^機関^に抗^議す^る手^段を^持っ^てい^なか^った。ま^た、^その^行政^の機^能は^失わ^れて^いた。我^々の^周圍^には、^警察^も消^防隊^も医^者も^いな^かっ^た。金^もな^かっ^た。食^べる^もの^を売^る店^もな^かっ^た。銀^行も^なか^った。人^を助^け得^る親^戚も^なか^った。し^たが^って、^この^救護^活動^は2、³日^で消^滅し^てし^まっ^た。仕^方の^ない^こと^であ^る。そ^れが、^当時^の指^導層^の認^識で^あった。想^象を^絶し^てい^た。

8月8日、私^は三^菱重^工に^出社^して、^田中^課長[（]後^に営^業部^長に^なる[）]と^共に^市の^中心^部に^出て、^坂内^主任^の行^方を^捜し^た。午^前8時^頃、^紙屋^町で^人待^ちし^てい^るは^ずだ^った。そ^こで、^紙屋^町を^中心^に付^近の^銀行[、]中^電、^浅野^図書^館、^市役^所、^福屋[、]中^国新^聞、^その^他の^学校^も、^今の^原爆^ドーム^の中^まで^も、^自転^車を^走ら^せて^捜し^てい^った。そ^れぞ^れに^たく^さん^の死^体が^散ら^ばっ^てい^た。田^中課^長は^私の^父母^を見^舞っ^てく^れた^が、^防空^壕に^寝起^きし^てい^た父^は、^当分^この^中で^暮ら^すと^言っ^て、^草津^へ引^きあ^げよ^うと^はし^なか^った。一^度や^られた^所だ^から、二^度は^爆弾^も落^とす^まい^との^計算^だっ^たか^もし^れない。

「^誠一^君、^戦い^はこ^れか^らだ^よ。」と^奥さん^を失^った^隣家^の岡^本町^内会^長（^退役^軍人[）]は、^傷一^つな^いと^威張^って^いた^が、^この⁵日^後に^原爆^症で^世を^去っ^た。私^は三^菱の^坂内^主任^を捜^すた^め己^斐小^学校^に行^った。校^庭も^講堂^も教^室も、^負傷^者で

足の踏み場もないくらいだが、そのまま治療を受けることもなく、死体置き場
に変わっていった。死体と死体の間に病人が寝ているという、鬼気せまる感じであ
った。死を予感した中学生は自分の体に、「宇品、堂管」と記した木片をのせてい
た。白いチョークで書いた文字が、今も私に印象深く刻まれている。天を突き、虚空
をつかんだ白い手、黒い手、小さな手……。

「びらん」(皮膚がただれくずれること)が始まった。その体臭は、私にまさに地獄
を連想させた。しかし、5年前に私が見た戦場には、それを上回る数々のシーン
があった。私は思った。我々は、まさに地獄に住んでいるのだ！草津小学校の収容所
も同様であった。治療の順番を待っている人たちは、そのまま死の順番を待って
いた。順番が来ると、校庭や広場に運び出されていった。市内の所々に、近所の
いたる所に、その煙がのぼっていった。坂内主任は、ついに発見できなかった。
後に、どこかで遺体が処理されたようで、「全身火傷圧死」という死亡診断書だけ
が奥様に渡された。私が大八車を押しているときに別れた5日の夕刻が、運命の
すれ違いであった。

8月9日、昇一を背負った美代子は自分の自転車に乗って、父母の見舞いのた
め市内に入った。半袖のブラウスを着ていたので、黒い雨に濡れた両腕に水疱が
できてきた。どうしたのであろうと、不審に思っただけであった。己斐から比治山
まで、一直線に視界を妨げるものがない有り様を見て、「アッ」と言っただけであ
った。

9丁目にいたる道路の両サイドは、まだ整理をしていない焼け残りの死体が所
々に散乱していた。宇品港から満ち潮で押し上げられたたくさんの死体が、上流
へとただよっていた。

美代子は一体一体に合掌していた。あの日から9日に至るも、私が通行人を見
ることは極めて稀であった。美代子も「人が歩いていないね。」と驚いていた。

父母を見舞って帰り道、末一叔父さん宅の隣家の主人に会った。

「あの時、藤岡の奥さんが、田村のおじさん、助けて助けて！と叫んでいたが、
私は倒れた家の下敷きでどうしようもなかった。許してください……。」と話した。

君の友人の吉川君が、水をかぶりながら母親の倒れている周辺の消火をした。
クギの踏み抜きで、足を血まみれにしながら母を救った話を聞いているでしょう。
自分の親、自分の子供、自分の妻の声を聞きながら、現場を脱出したという話は
数限りなく聞いた。

帰路は大手町9丁目から紙屋町へのコースをとった。市役所前の死体は片づけ
られていた。鳥屋町付近と相生橋には、焼けた電車が放置されていたように思う
が、今では定かな記憶がない。横川線江波線の電車道は、竹の柱と粗ムシロで三
方を囲んだ仮小屋が、急造されていった。家を失い傷ついた被爆者が、トロ箱に詰

められた魚のように、頭と足を互い違いにして並べられた。その電車の所々に煙がのぼっていた。

空鞆町の土手アスファルト上は煮えていたのであろう。男性の遺体がその中に埋没し、白いシャツだけが路面に表れていた。美代子はひと言「むごい！」と言った。

この間、どのような会話をしたか覚えていないということは、二人とも何も語らなかったであろう。まさに、地獄の絵図であった。その絵図と私が（仏を信じるものは救います）と啓示を受けた夢の映像は二重に重なって、私に鮮烈な記憶を残した。（中略）

8月10日、私は美代子、昇一、弟妹を連れて、赤松氏の案内で用意された五日市観音村の百姓家に移った。そこには、4升樽に入った3樽の白米とたくさんの芋があった。赤松氏は「この食料は今日の事態を予測して、私が用意していたものです。私を朝鮮人と知っていて、差別せずに付き合ってくださいあなたたちへの贈り物です。しっかり食べて、元気になってください。」と言って、私たちを励ましてくれた。

「先日は熱かったです。この次は冷凍爆弾で冷やしてあげます。」とアメリカの飛行機がビラを撒いたとの流言が広がって、人々の肝を冷やした。ソ連が参戦したそうどうわさが流れ始めた。憲兵はそれを否定して人々に伝えたが、焼け跡に人影はなく、空しく焦土の空間に消えていった。

8月14日、ラジオは、15日に重大なニュースがあるから国民はラジオの前に集まるようにと放送した。日本降伏の予感があったので、8月15日は浜田の榎橋家に、美代子と昇一を預けるべく出発することにした。玉音放送を聞いて、午後3時に五日市駅より汽車に乗り広島駅に向かったが、午後5時頃、列車は横川鉄橋の上で動かなくなった。夜が深くなるにつれ、見渡す限りの焦土は、青いリンがポーポーと燃えていた。すすり泣くように、広島が青く燃えていた。

鉄橋の上で止まったままの列車の中で、我々3人は肩を寄せ合って息をひそめていた。広島駅に着いたのは、午後8時であった。そこから芸備線に乗り、木次経由で浜田の榎橋家に着いたのは、午後6時であった。

牧ちゃんが玄関に出て、「姉ちゃんが帰ったよ。足が生えてるよ。」と叫んだのが今も耳に残っている。私は倦怠感から虚脱症へと移行していった。思考力が極端に低下していった。美代子は腕の水疱が大きくなり、皮がむけ始めた。あまり長居できない状態と判断したので、1週間ぐらいで広島へ帰った。

また観音村から観音町三菱重工への勤めが始まったが、原爆症が出て体力は目に見えて衰えてきた。お灸がよいというので、二人とも1日に60ぐらいの灸を

すえた。灸ははしから化膿かのうしていった。柿かきの葉せんも煎じて飲んだ。赤松氏あかまつが作って
くれる朝鮮料理いっしやうけんめいも一生懸命いっしやうけんめいに食べた。三菱重工みつばちゅうこうは退職者たいしやくしやをつのった。私はどうて
い出勤しゅつぎんできなくなってきたので、退職組たいしやくぐみに入った。退職金たいしやくきんをもらって帰宅きたくし、貴
重品袋ちやうひんぶくろに入れて、居間いまの柱かに掛けた。

その後そののち（昭和20年9月17日）、枕崎台風まくらざきが広島ひろしまに上陸かづりした。川面かわもを見張りし
ていた私は増水の速度そくどが速いので、家の者ものたちに声をかけ、土手どてづたいに50m
避難ひなんした。

「アッ、貴重品袋きちやうひんぶくろを忘れた！」と気づいて引き返そうとしたら、消防隊しょうぼうたいの人たち
に危あぶないと止められた。貴重品袋きちやうひんぶくろは濁流だくりゆうの餌食えじきになった。失業しやうしやくし、無一文むいちぶんになり、
夫婦ふうふが原爆症げんぱくしやうとは、まったく言葉ことばもない。しかし、これはまだまだ私たちにとつ
ては序盤じよばんの体験たいけんであった。もう書くのみ嫌いやになるが、そうした苦難くなんを美代子みよこはよ
く頑張がんばった。そして、不可能ふかうねいを可能かうねいにしていった。